

## 16. 古墳の出現

### 見学の重点

各クニを治めていた地域首長は、「古墳」という土を高く盛り上げた大きな墓を造りました。考古博物館周辺は特に大きな古墳が多いことで知られています。このコーナーでは、考古博物館周辺の東山古墳群の航空写真を展示してあります。この写真から、東山古墳群ひがしやまこふんぐんに属する古墳の名前、位置、形を読み取ることができます。

- ①古墳にはどのような形があるでしょう。航空写真から古墳の形を読み取ってみましょう。
- ②古墳にはどのような人が葬られているのでしょうか。出土した副葬品などを参考に、考えてみましょう。
- ③古墳の形は時代とともにどのように変化していったでしょう。

畿内政権と地域首長の関係が強くなったことで、3世紀末には各地で前方後円墳などの古墳が造られるようになりました。こうして古墳が造られるようになった3世紀末から7世紀を古墳時代とよんでいます。

今日、私たちが目にする古墳は小山のように盛り上がり、木がうっそうと茂っているものがほとんどです。しかし通常、造られた頃は形が整えられ、表面はたくさんの葺石ふきいしで覆われていました。正確な設計図に基づき、技術者の指揮のもとに土を盛り上げ、形を整えて仕上げたものです。古墳の形にはいろいろなものがあります。丸い形をしたものを円墳えんふん、正方形のものを方墳ほうふんとといいます。代表的な古墳である前方後円墳ぜんぽうこうえんふんは、後円部の円形と前方部の方形を合わせた形をしています。後円部の所が四角形せうがけいのものを、前方後方墳とよんでいます。博物館周辺の甲斐銚子塚古墳かいしやうしづかこふんは前方後円墳、丸山塚古墳まるやまづかこふんは円墳です。

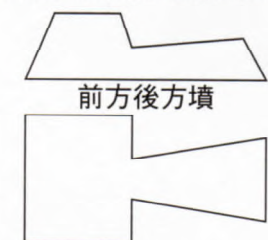
山梨県の古墳の中で最大のものは甲斐銚子塚古墳で、全長169m、前方部の幅68m、後円部の直径92m、高さが15mあります。近畿地方の巨大古墳よりはやや小さめですが、4世紀後半頃の古墳としては東日本では最大級のもので、ちなみに全国で53番目の大きさです。現代の工法で甲斐銚子塚古墳を築造した場合、1日500人が働いたとして約2年間が必要だったと考えられます。

古墳に葬られた人物が誰なのかは、資料などがほとんど残っていないため不明です。しかし、たくさんの人を動員して巨大な墓を造らせることができた人物なので、いくつものムラを合わせたクニの有力者だったと考えられています。

古墳の形は時代とともに変化していきます。初めの頃の古墳は、前方後方墳や前方後円墳、円墳が見られ、高い地位にある人のみが埋葬されました。副葬品は鏡・銅の矢じり・鉄の剣・玉や鉄製の農耕具などです。5世紀に入ると、各地で前方後円墳がつくられるようになりました。副葬品は武器や武具が増えます。6～7世紀の頃には横穴式石室よこあなしきせきしつをもつ古墳が多くなり、次第に小型化し、形も円墳が多くなります。地元の有力者の他に有力な家長層も古墳を造り始め、群集墳ぐんしゅうふんとよばれる集団墓地をつくるようになりました。しかし、西暦645年の『大化の改新』以降、古墳は次第に姿を消していきます。

甲府盆地南東の曾根丘陵の台地の先端、東山の北東斜面の山麓にある古墳を東山古墳群とよんでいます。東山古墳群には、東山の山麓中に大丸山古墳(前方後円墳)、平地と接するあたりに甲斐銚子塚古墳(前方後円墳)、その東に丸山塚古墳(円墳)、かんかん塚(茶塚)古墳(円墳)などがあります。周辺にも多数の遺跡があり、笛吹市八代町岡銚子塚古墳などは、山梨県の古代史を考える上で重要です。

### ●おもな墳形と県内の主な古墳



前方後方墳

小平沢古墳(甲府市)



前方後円墳

岡銚子塚古墳(笛吹市)

王塚古墳(中央市)  
物見塚古墳(南アルプス市)など



円墳

姥塚古墳(笛吹市御坂町)

加牟那塚古墳(甲府市)  
牧洞寺古墳(山梨市)など



方墳

竜塚古墳(笛吹市八代町)

鳥居原狐塚古墳(市川三郷町)

## 17. 大丸山古墳

### 見学の重点

東山古墳群の1つ、4世紀中頃の前方後円墳である大丸山古墳の出土品を展示しています。

- ①大丸山古墳に納められた副葬品の中で特に注目されているのは、戦いに使った道具(武器や武具)、農業や工作に使った道具(農工具)、鏡です。展示されているものの中から、武具、農工具、鏡をさがしてみましょう。

大丸山古墳は甲府市下向山町にある前方後円墳で、甲斐銚子塚古墳や丸山塚古墳を見下ろす位置にあります。墳丘は自然地形を加工した二段築成で、全長99m(ないしは120m)、後円部直径47m、前方部幅34m(ないしは49m)と前方部が細長い形をしています。埋葬施設は、<sup>たてあなしき</sup> 竪穴式石室の中に組合式石棺がおさめられています。石棺の中から成人男女の人骨と二人用の石枕、<sup>さんかくふくしんじゅうきょう</sup> 三角縁神獸鏡など銅鏡3面、管玉、ガラス玉などが出土しました。石室の内部からは武具であるよろい(短甲)や刀・つるぎ(剣)などの武器、<sup>ちやうな</sup> 手斧・やりがんな・<sup>のみ のこぎり</sup> 鑿・鋸・斧などの鉄製農工具などが出土しました。



よろいは古くから、有力者の武力・権力の象徴でした。最も古いものでは弥生時代後期の革製の防具や木製の短甲が知られています。古墳時代になると、鉄製のよろいが出現します。よろいには短甲と挂甲の二形式がありますが、古くは短甲が主流を占めていました。大丸山古墳から出土した短甲は縦長の鉄板17枚を革でとじ合わせたもので、日本でも最も古い短甲の1つです。

古墳時代になると木製の身に鉄製の刃先を付けた鋤、鍬、鎌などの農工具が作られるようになります。鉄製農工具の多くは古墳から出土しており、おそらく初期の鉄製農工具は有力者が所有し、農民にとってはめったに手に入らない貴重なものだったと思われます。大丸山古墳からは上にあげたように多くの種類の鉄製農工具が出土しています。そのうち手斧は木の表面を削る道具ですが、大丸山古墳出土のものは柄も鉄でつくられています。また、<sup>びやうどめ</sup> 鉋留の技術が用いられており、大陸製ともいわれています。

なお、石棺の全面に朱が塗られていました。有力者が亡くなった時、遺体を安置した棺の内部や頭の周辺に朱やベンガラを塗ったものが多く見られます。これは赤色が特別な意味をもった神聖な色だからだと考えられていたからです。

なお、石棺の全面に朱が塗られていました。有力者が亡くなった時、遺体を安置した棺の内部や頭の周辺に朱やベンガラを塗ったものが多く見られます。これは赤色が特別な意味をもった神聖な色だからだと考えられていたからです。



短甲



ちやうな  
手斧



考古博物館正面から見た大丸山古墳

## 18. 甲斐銚子塚古墳・丸山塚古墳

### 見学の重点

このコーナーは、4世紀後半から5世紀初めにかけて造られた甲斐銚子塚古墳と丸山塚古墳の出土品などを中心に展示してあります。まず甲斐銚子塚古墳については、全景を写真で示し、墳丘に置かれていた埴輪と石室内に埋葬されていた副葬品、古墳の周溝部から出土した木製品などを展示しています。

①この時代の古墳には鏡や装身具など、おもに祭りに関係のあるものが副葬されています。展示されているものの中から祭りに関係のあるものをさがしてみましょう。

甲斐銚子塚古墳(甲府市)は、全長169mの山梨県最大の前方後円墳です。隣の丸山塚古墳とともに国史跡に指定されています。葺石や埴輪があったことが知られていますが、埴輪は関東地方でも最も古い種類の円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪などです。おもな副葬品は、三角縁神人車馬鏡など銅鏡5面、鉄斧、鉄鏃、直刀、剣、玉類、石釧、車輪石、石製杵、貝輪などです。丸山塚古墳は銚子塚古墳の東方にある直径72mの県内最大の円墳です。明治40(1907)年に偶然に発掘され、石室からは鏡などが出土しました。

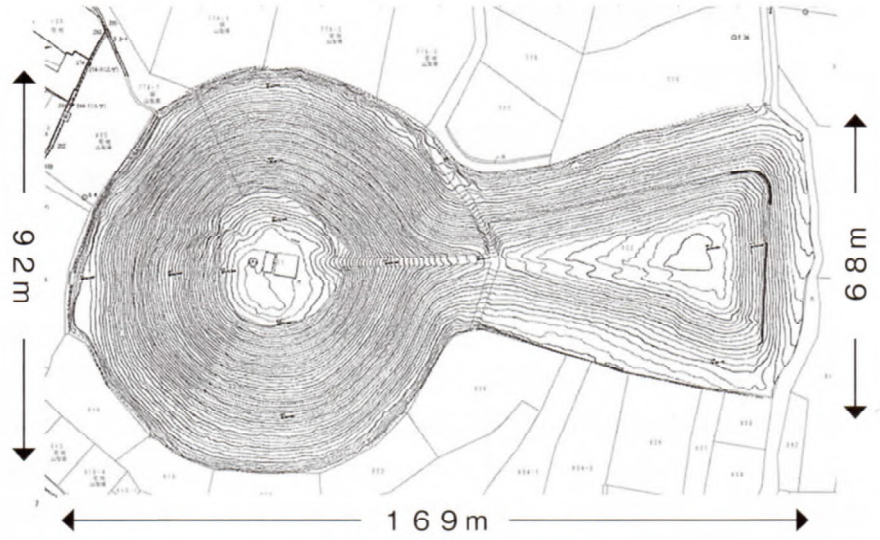
これらの古墳が造られた古墳時代前期の副葬品の中心は、青銅製の鏡や剣、玉をはじめとした装身具など祭りに関係するものです。鏡は姿を映すほうが表で凸面になっていて、そこには模様を描きません。古墳から出土したままの錆び付いた状態をみると、本当に姿が映ったのかと疑問に感じますが、実験的に作った鏡を見ると当時は磨かれた面に姿を映すことができたことがわかります。展示してある実験的に作られた鏡をのぞいて自分の姿を映してみましょう。背面に幾何学模様、獣、神像などが描かれています。鏡は当初中国から伝えられ、畿内(ヤマト)勢力との強い結びつきをあらわす証として、国産のものも含めて地方有力者に分与されました。ほとんどが古墳に埋葬されています。

東山古墳群では、大丸山古墳から三角縁神獸鏡など3面、甲斐銚子塚古墳から三角縁神獸鏡など5面、丸山塚古墳から神獸鏡1面が出土しています。三角縁神獸鏡は鏡の一番端の縁の断面が三角形になっている鏡で、模様は神人や獣が中心です。また、古墳から一番多く出土する鏡でもあります。さらに、三角縁神獸鏡は同じ鋳型で鋳造された同じ大きさ・同じ模様の鏡が、近くばかりでなく遠くの古墳からも出土することがあります。これは畿内(ヤマト)勢力との結びつきの広がりを示すと考えられています。大丸山古墳の鏡は静岡県寺谷銚子塚古墳や岐阜県坂尻古墳出土の鏡と、甲斐銚子塚古墳の鏡は岡山県備前車塚古墳、群馬県三本木古墳、福岡県藤崎遺跡出土の鏡と同じ鋳型でつくられています。その他、県内で発見された古い鏡としては、県内最古で唯一の前方後方墳である小平沢古墳(甲府市)から銘文をもつ漢代の鏡1面、市川三郷町鳥居原狐塚古墳からは中国の呉の年号「赤烏元年」(238年)と記された鏡が出土し、展示(レプリカを含む)されています。

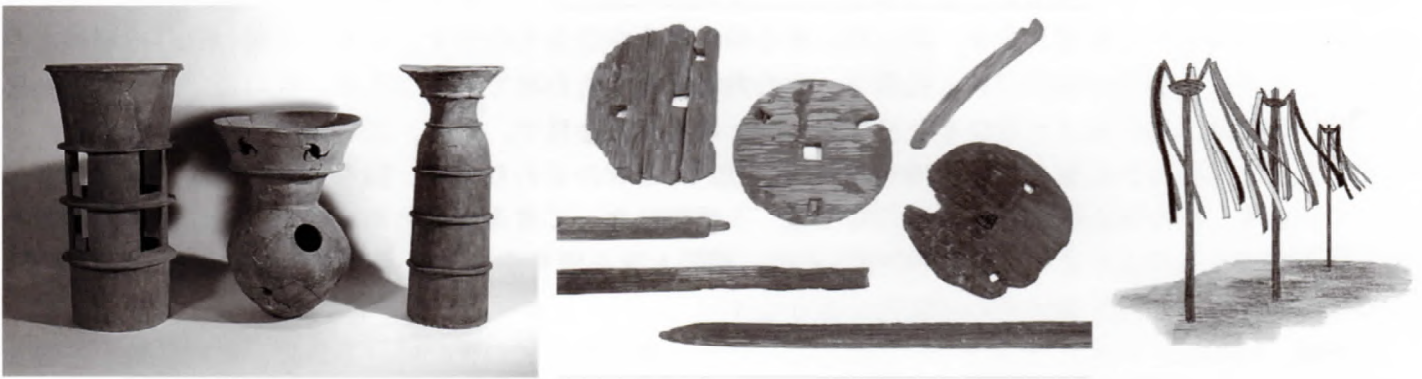
装身具としてなかでも注目すべきものは、甲斐銚子塚古墳から出土した貝輪、石釧、車輪石などです。貝輪に使われる貝はいずれも南産で、宝物としてあつかわれました。甲斐銚子塚古墳出土の貝輪のほか、静岡県松林山古墳などからも発見されています。石釧や車輪石は貝輪をまねて石でつくったものです。



甲斐銚子塚古墳と  
丸山塚古墳  
古墳をしらべよう



甲斐銚子塚古墳を上から見たかたち



甲斐銚子塚古墳出土の貝輪(上)・埴輪(左)・木製品(中央)・木製品復元図(右)



甲斐銚子塚古墳(手前)と丸山塚古墳(奥)



甲斐銚子塚古墳墳端に復元された木柱



丸山塚古墳の竪穴式石室

## 19. かんかん塚(茶塚)古墳

### 見学の重点

このコーナーでは、5世紀後半に造られたかんかん塚(茶塚)古墳の出土品を展示してあります。

- ① 5世紀後半の古墳には主に馬につける道具(馬具)や戦いの道具(武具や武器)、装身具などが納められています。展示してあるものの中から馬具をさがしてみましょ。

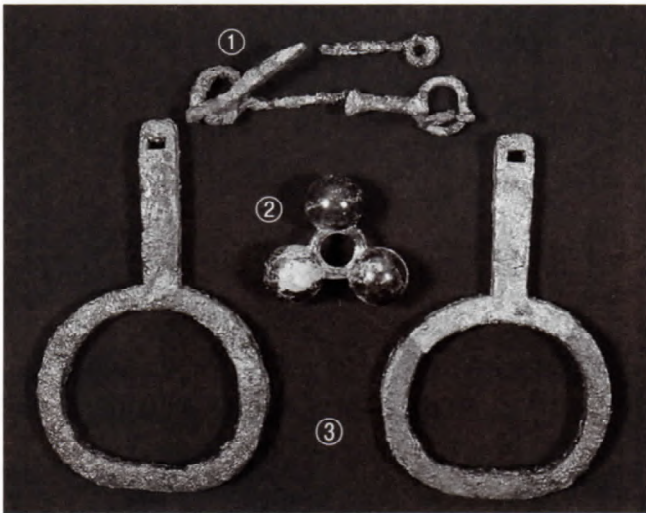
かんかん塚(茶塚)古墳は甲府市下曾根町にある直径21m×26mの楕円形をした古墳です。副葬品は、よろい(短甲)・冑などの武具、刀子、そして鐙・轡・三環鈴・帶金具などの馬具類が知られています。

日本では5世紀頃から乗馬の風習が取り入れられ、6～7世紀の頃から馬具が盛んに用いられるようになりました。馬具は馬に乗るための装備で、古墳時代後期の主要な副葬品の1つです。かんかん(茶塚)古墳から出土した馬具は、馬具の中でも初期のもので乗馬の風習がいち早く甲府盆地にもたらされたことがわかります。かんかん塚(茶塚)古墳の後の、古墳時代後期に造られた笛吹市春日居町平林2号墳、同市八代町古柳塚古墳、甲斐市竜王2・3号墳などからも馬具が出土しています。轡は馬を制御するためのもので、馬の口に噛ませて使用します。鐙は馬に乗る時に足をかけるものです。かんかん塚(茶塚)古墳出土のものは足をかける部分が輪状である輪鐙で、木の角棒を丸くたわめて形をつくり、鉄の板で覆われています。飾り金具は、馬に付けた草ひもなどを飾ったと考えられる金具で、杏葉、三環鈴などがあります。

武具としてはかんかん塚(茶塚)古墳からよろい(短甲)と首のまわりや肩、腕を覆う付属品、冑などが出土しています。かんかん塚(茶塚)古墳の短甲は、5世紀になって考え出された形式で、横に長い鉄の板を鋸で留めてつくってあります。同様の短甲は市川三郷町大塚古墳や中央市王塚古墳からも出土しています。なお冑は特殊で、朝鮮半島伝来の可能性があります。

刀や剣、弓矢などの武具は鉄でつくられるようになりました。矢の先に付ける鏃は、県内各地の古墳などから出土していますが、先の細い貫通力の強いものや、先が大きい破壊的なものなどが見られます。

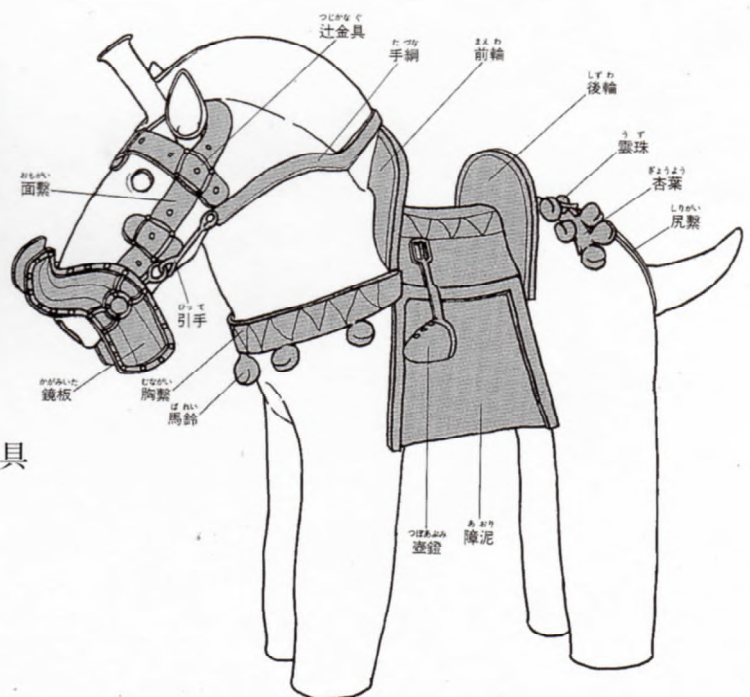
### ●出土した馬具



- ① 轡  
たづなをつけるために、馬の口にふくませる金具

- ② 三環鈴  
馬の尻や胸につけるもの

- ③ 鐙  
足をかけるところ



群馬県立歴史博物館『藤ノ木古墳と東国の古墳文化』より

## 20. 古墳時代初めの暮らし

### 見学の重点

このコーナーでは、古墳時代初めの生活や祭祀に関するものを展示しています。ここで展示しているのは、甲府市の榎田遺跡や南アルプス市村前東 A 遺跡など、県内各地から出土した今から 1,600 年程前の古墳時代前期の人々が日常生活に使った土器です。

①甲府盆地に甲斐銚子塚古墳などの大きな古墳が造られた時代、ムラの人々は日常の生活にどのような道具を使っていたのでしょうか。

甲府市の榎田遺跡や南アルプス市の村前東 A 遺跡など甲府盆地内の遺跡では、古墳時代前期の集落跡や墓域が発掘調査され、<sup>たてあな</sup> 竪穴住居や <sup>ほったてばしら</sup> 掘立柱の建物の跡が発見されています。展示してある土器は、住居跡や墓の溝などから出土したものです。

古墳時代前期の人々が使った土器は、<sup>はじき</sup> 土師器といます。土師器は縄文・弥生時代の土器の伝統をひく素焼きの土器で、普段の生活に欠かすことのできないものでした。この時期、伊勢湾岸部で作られ、<sup>だいつきがめ</sup> 台付甕(S 字状口縁台付甕)は、<sup>ころえん</sup> 輪積み法や巻き上げ法で作られ、薄手でそれまでのものより熱効率がよくなりました。表面や裏面は器壁を薄くするために薄い板状の工具で余計な粘土を削り取り、<sup>つば</sup> 壺などの表面はへら状の工具で磨かれました。焼成は、地面に穴を掘り、その中に土器を置いて薪をまわりに積みあげて野



古墳時代の初めに使われた土師器

焼きという方法で行われ、焼成温度は 700 ～ 800 度程度でした。この時期の土器は<sup>もみ</sup> 杵などを保存する壺、煮炊きに用いる甕、料理を盛りつける高坏、壺などを乗せる器台などが使われました。

発掘調査によると、古墳時代の住居のほとんどは縄文時代から続く竪穴住居で、十数軒の家が集まってムラをつくっていたと考えられています。しかし、竪穴住居も住みやすさを考えて弥生時代の楕円形から方形に変わりました。炉(いろり)の中には甕を置いて煮炊きしていましたが、沸騰をなるべく早めるために、甕の底付近に火を当てる工夫として、甕の底部分に台を付けました。

また、古墳時代中期になると次第にかまどが導入され、煮炊きの方法が変化していきます。かまどが登場したことで熱効率がさらに高まり、煮る・炊く・蒸すなどの調理が迅速に行えるようになりました。さらにかまどとともに、米を蒸すための甑など、新しい器種が登場しました。一方、それまで料理を盛りつけた高坏に変わり、<sup>わん</sup> 碗が使われるようになりました。碗の登場により<sup>めいめいざら</sup> 銘々皿が普及し、一軒で保有する器の数が増加しました。山梨県では、かまどは古墳時代中期後半になって、導入されるようになります。笛吹市御坂町の二之宮遺跡や甲府市の朝気遺跡などで、導入されたばかりのかまどが確認されています。

食生活の変化とともに、集落や古墳では祭祀が行われました。集落では鏡や刀などを、<sup>かつせき</sup> 滑石など柔らかい石や粘土で模倣した模造品の出土が認められます。また、市川三郷町の大塚古墳からは、巫女埴輪に見られる鈴付きの銅製釧や鈴鏡が出土しています。



榎田遺跡発掘状況



村前東 A 遺跡発掘状況

## 21. 須恵器

### 見学の重点

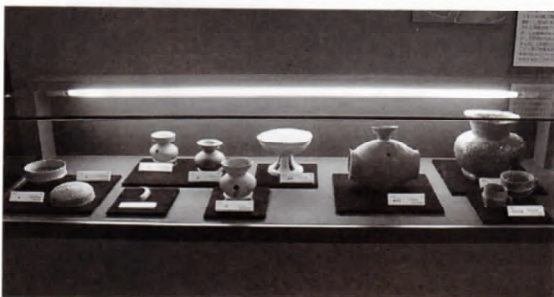
このコーナーでは、東山南遺跡<sup>ひがしやまみなみ</sup>や岩清水遺跡<sup>いわしみず</sup>(甲府市)、二之宮遺跡<sup>にのみや</sup>(笛吹市御坂町)などから出土した須恵器を集めて展示してあります。また、パネルによって須恵器の焼き方を示してあります。

- ① これまでに見てきた縄文土器や弥生土器、土師器<sup>はじき</sup>と比べて、ちがいを観察してみましょう。
- ② 古式の須恵器は独特の形をしています。どのようなものがあるでしょう。

古墳時代中期には須恵器とよばれる新しい器を作る技術が朝鮮半島から伝わりました。須恵器は作り方が縄文・弥生土器とは全く違っています。大きな違いは、器をつくる時にろくろの上に粘土を置いて形をつくるようになったことと、まわりを土の壁で覆った穴窯<sup>あながま</sup>の中で1000度以上の高温で焼くようになったことです。登窯<sup>のぼりがま</sup>といって斜面を利用してトンネル状の窯で焼きました。焼き上がったら窯の入口をふさいで酸欠状態<sup>はそう とってつきわん</sup>にすることで灰色に仕上げます。形には甕や把手付碗<sup>はそう とってつきわん</sup>など、朝鮮半島独自のものも作られました。須恵器は、5世紀初頭に畿内政権のもとで大陸から渡ってきた工人集団が畿内で工房を展開し、ここで焼かれた須恵器は日本各地へ運ばれました。その後古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて各地でも盛んにつくられました。須恵器は固く、叩くと金属音に近い音がします。古墳の副葬品の中に多くみられ、特に須恵器の大甕<sup>おおがめ</sup>は、故意に破碎されたと考えられる状態で、古墳の入口付近や墳丘から出土することもあります。日用品としては数が少なく、大変貴重なものであったようです。

山梨県では、米倉山B遺跡<sup>こめくらやま</sup>(甲府市)の土坑<sup>どこう</sup>から大陸より伝わって間もない、大変古い形態の須恵器甕が出土しています。また、曾根丘陵<sup>そねのきりゅう</sup>上に盆地を見下ろすように所在する東山南遺跡<sup>ひがしやまみなみ</sup>や、丘陵下の岩清水遺跡<sup>いわしみず</sup>の円形周溝墓周溝部<sup>えんけいしゅうこうぼしゅうこうぶ</sup>をはじめとして、甲府盆地各地に分布する円形周溝墓からは、米倉山B遺跡の須恵器に後続する須恵器が出土していて、須恵器が大陸からもたらされた当時、甲府盆地にどのようにもたらされたのかや、須恵器の持つ意味を考える上で重要です。また、6世紀後半には甲府盆地の古墳にも須恵器が副葬されました。笛吹市春日居町<sup>ひらばやし</sup>に所在する平林2号墳<sup>ひらばやし</sup>の横穴式石室<sup>かめ はそう よこべい</sup>からは、甕や甕、横瓶<sup>よこびん</sup>などさまざまな器種の須恵器が出土しています。同市一宮町の四ツ塚古墳群<sup>よつづか</sup>では、石室前で破碎された甕が出土しています。

さらに山梨県での須恵器の生産は、6世紀後半に笛吹市境川町<sup>しもむこうかまあと</sup>下向窯跡<sup>しもむこうかまあと</sup>に始まり、7世紀後半には同町牛居沢窯跡<sup>うしいざわ</sup>や甲斐市の天狗沢瓦窯跡<sup>てんぐざわ</sup>でも始まります。須恵器生産の技術は山梨県にも伝わりましたが、発見例は少なくそれほど定着しなかったようです。



展示された古式の須恵器



須恵器



登り窯で須恵器を生産するようす